

# 免疫・アレルギー（旧免疫異常）ネットワーク 研究グループの現況

座長 谷口正実<sup>†</sup>第72回国立病院総合医学会  
(2018年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 10 (424-427) 2020

## 要旨

免疫・アレルギー（旧免疫異常）研究グループは、リウマチ、小児アレルギー、成人アレルギーの3班に分かれるが、昭和40年代の国立病院時代の難治のアレルギー・リウマチ患者に対する良質な医療を行うための“政策医療”を基に、相模原病院（当院）が中核施設となり、現在では、50施設以上、100名以上の研究者の参加により、活発な臨床研究を行っている。

・リウマチ班では、世界有数のリウマチ患者登録システムの構築と運用を行っており、そこから数多くのエビデンスレベルの高い成果をあげている。

・小児アレルギー班では、食物アレルギーを中心に、わが国の指導的な立場として負荷試験のネットワークを構築し、世界的な研究成果だけでなく、行政や学校保健にかかわる実績をあげている。

・成人アレルギー班では、喘息をはじめとして多種多彩な難治性アレルギー疾患の診療や臨床研究の国の中心として、多くの世界的な成果をあげている。

・2017年に、成育医療研究センター（小児アレルギー）と相模原病院（小児・成人アレルギー）の2施設が、国のアレルギー疾患対策の中心拠点病院に指定された。これもあり、わが国のアレルギー医療の構築と発展のため、人材育成、難治患者診療、臨床研究の推進に、今後も努力する所存である。

キーワード アレルギー, リウマチ

## 免疫・アレルギー（旧免疫異常） 研究グループの構成（図1, 2）

平成16年に国立病院から国立病院機構（NHO）病院に移行した。移行した当時の平成17年度のNHO免疫異常研究グループの構成を図1に示す。当時は、厚生労働省から指定された高度専門医療施設である相模原病院（当院）が中心施設となり、各

地域の代表として、リウマチやアレルギー専門医が多い基幹医療施設8施設（相模原含む）、そのほか専門医療10施設、ネットワーク参加11施設の計29施設と参加医師数約60名で運営されていた。当時は、臨床研究だけでなく、臨床や施設の諸問題もよく討議された。その後、平成21年度頃から広く本研究グループへ参加が呼びかけられた。

平成30年（2018）時点でのNHO免疫・アレルギー

国立病院機構相模原病院 臨床研究センター（現所属：湘南鎌倉総合病院免疫・アレルギーセンター）<sup>†</sup> 医師  
著者連絡先：谷口正実 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター事務室  
〒252-0392 神奈川県相模原市南区桜台18-1

e-mail : masamit11111@yahoo.co.jp

(2019年8月29日受付, 2020年10月15日受理)

State-of-the-art Clinical Research in the Field of Allergies and Rheumatism

Current Status of Immunology/Allergy (Formerly Immune Abnormality) Network Research Group

Masami Taniguchi, NHO Sagami Hospital Clinical Research Center for Allergy and Rheumatology

(Received Aug. 29, 2019, Accepted Oct. 15, 2020)

Key Words : allergy, rheumatology

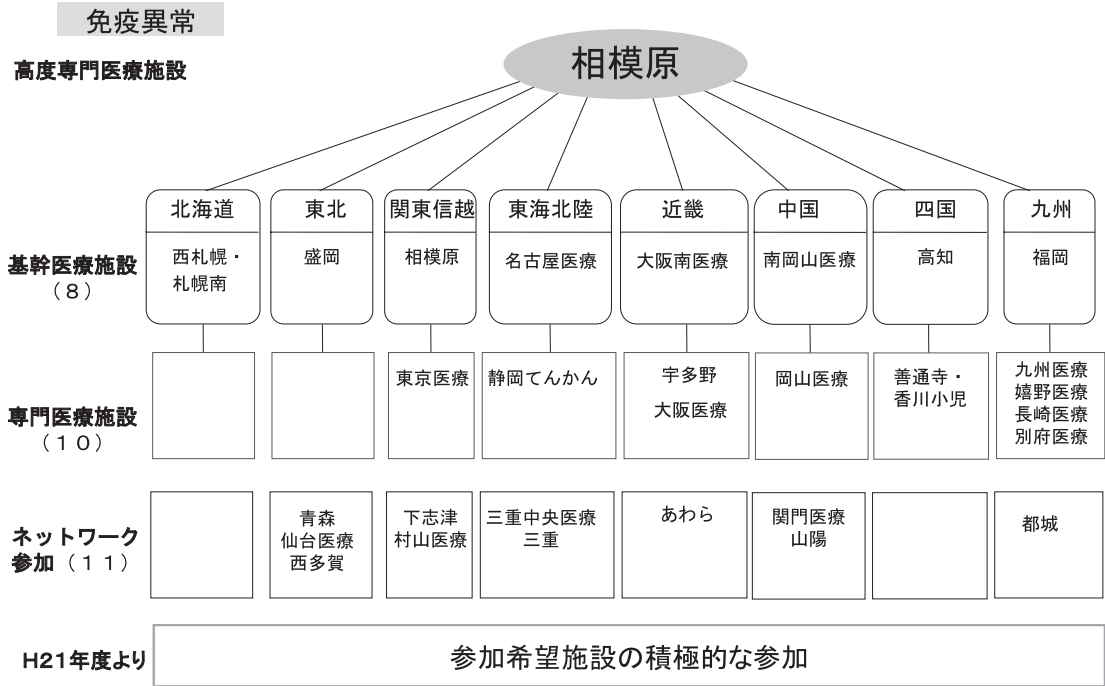


図1 平成17年度当時の免疫異常NHOネットワークの参加29施設

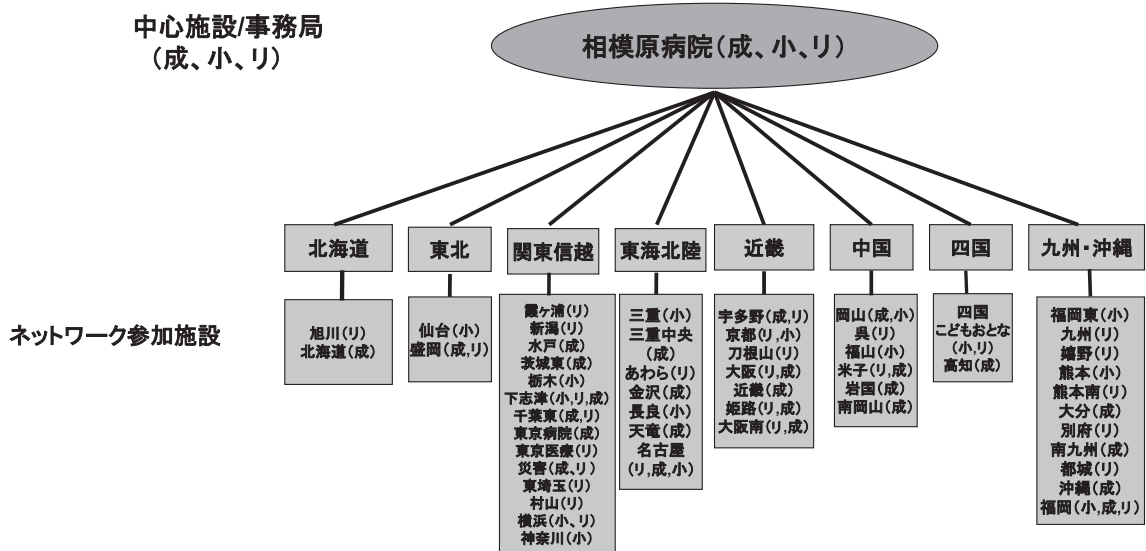


図2 平成30年(2018)度のNHOにおける

成人・小児アレルギーとリウマチのネットワークを構成する53施設：

成：成人アレルギー 小：小児アレルギー リ：リウマチ・膠原病  
(病院名のうち、「病院」もしくは「医療センター」の名称は省略、順不同)

(旧免疫異常)研究グループを図2に示す。本グループは、3つの研究班、すなわちリウマチ班、成人アレルギー班、小児アレルギー班で構成されている。現時点での総参加施設は53病院であり、13年前に比べ大きく増加しており、総参加医師数(=免疫異常

研究協議会、あるいはネットワーク研究に参加した医師)も106名と倍増した。内訳はリウマチ班(リウマチ内科+リウマチ外科)が50%、成人アレルギー班が30%、小児アレルギー班が20%である。従来から、本グループの約半数はリウマチ班であり、旧国

表1 2018年度進行中の免疫異常グループにおけるネットワーク/EBM研究

- 平成27年度採択(延長中)
  - ①(EBM)日本人化学物質過敏症の遺伝的背景と病態解明  
相模原 谷口正実(成人アレルギー)
- 平成28年度採択
  - ②関節リウマチ患者における遺伝子変異のTNF阻害薬一時無効への関与に関する研究  
大阪南 佐伯行彦(リウマチ)
  - ③関節リウマチ関節組織を用いた観察研究、ネットワーク体制の拡充と病態解明  
大阪南 橋本 淳(リウマチ)
  - ④成人喘息の実態調査と重症喘息のクラスター解析  
東京病院 大田 健、鈴川真穂(成人アレルギー)
- 平成29年度採択
  - ⑤牛乳アレルギー発症ハイリスク乳児に対する発症予防の確立 多施設共同試験  
相模原 海老澤元宏(小児アレルギー)
  - ⑥長引く咳嗽に対する新規診断治療アルゴリズムの有用性、非ランダム比較試験  
相模原 関谷潔史(成人アレルギー)
  - ⑦反復喘鳴を呈した1歳児の発症予測フェノタイプに関する研究  
三重 長尾みづほ(小児アレルギー)
- 平成30年度採択
  - ⑧実臨床における喘息に対する生物学的効果と効果予測指標の確立に関する研究  
相模原 森 晶夫(成人アレルギー)
  - ⑨関節リウマチ関連間質性肺病変の低分子代謝産物/バイオマーカーの探索  
東京病院 當間重人(リウマチ)
- 平成30年度採択(最終審査待ち)
  - ⑩(EBM)日本におけるアナフィラキシーの調査研究  
相模原 海老澤元宏(小児アレルギー)
  - ⑪(EBM)日本人EGPA(旧Churg Strauss,アレルギー性肉芽腫性血管炎)患者の遺伝的背景と新規治療介入  
相模原 関谷潔史(成人アレルギー)

立病院時代から、リウマチ医療を担っている施設や医師数が多いことが反映されている。また直近の5年間においても、全体の参加施設数、医師数ともに、20%増加している。これらの増加が、NHO免疫・アレルギーネットワーク研究の原動力になっているといえる。

### 相模原病院における免疫・アレルギー分野の変遷

免疫異常研究班は、昭和48年(1973)に国立病院相模原病院がリウマチ・アレルギー基幹施設に指定されたことにルーツを有する。当時からは多くの難治性喘息患者とリウマチ患者が入院していたとされるが、昭和50年(1975)に、国立病院ではじめての臨床研究部が設置され4名の理学博士と臨床医による共同で、アレルギー・リウマチ分野における精力的な研究が開始された。その後、平成11年(1999)には、免疫異常(リウマチ・アレルギー)の高度専門医療施設(準ナショナルセンター)に指定され、多くの臨床実績と研究業績が評価され、平成17年(2005)には厚生科学審議会にてわが国のリウマチ・アレルギー医療の中心的施設と明記された。その後、

平成26年(2014)アレルギー疾患対策基本法が立法化され、平成29年(2017)に制定された同基本法の指針において成育医療研究センター(小児アレルギー)と当院(小児・成人アレルギー)がわが国の中心拠点病院として指定された。これにより、さらに若手医師などの人材育成・研修、難治患者の診療、質の高い臨床研究の推進に力を注いでいる。また、平成29年(2017)には、WAO(世界アレルギー機構)においてCenter of Excellenceに指定された。このように多くの方々の努力と患者スタッフのご支援により、国の中心施設として国外にも浸透した施設として実績を重ねている。

### 現在の免疫・アレルギー(旧免疫異常)グループにおけるNHOネットワーク研究

表1に2018年度時点での本研究グループが責任担当施設として行っているNHOネットワーク研究とEBM研究テーマを示す。多くのNHOネットワーク研究の中でも、免疫・アレルギーグループは、多数のテーマが採択されており、本研究グループの臨床研究が盛んであることがわかる。この要因として、

アレルギーやリウマチ分野では、国立病院時代から現在にかけて、大学病院レベルに精力的に研究や臨床を行っている施設が多いこと、NHOでの対象患者数が多いこと、他のグループと異なり3つの分野（成人・小児アレルギーとリウマチ）があり研究内容も多種となることが考えられる。また三重病院小児科の藤澤グループによるワクチンに対するアナフィラキシー研究も国際的な業績をあげている。

さらに本グループでAMED研究に採択され進行中のテーマとして、谷口正実（相模原）が代表を務める「NSAIDs不耐症の病態解明と新規治療薬の開発」と海老澤元宏（相模原）が代表を務める「小児食物アレルギーの診断法と新規治療薬の開発」が進

行中であり、それぞれ世界的な業績を多く上げており、その成果は、各種ガイドラインや診療の手引きにも多く引用されている（内容は別稿を参照）。

リウマチグループにおいては、當間、松井らによる日本最大のリウマチ患者1万人以上のレジストリ研究とそれを用いた多くの臨床研究が進行中であり、多くの世界的な業績を上げており、日本のリウマチ医療の現況も垣間みることができる（別稿参照）。

**著者の利益相反：**本論文発表内容に関連して申告なし。